

# モラエスの庭

— (1) 日記文学・随筆文学ということ —

宮崎隆義, 佐藤征弥, 境泉洋

徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部

〒770-8502 徳島市南常三島町1-1

E-mail: miyazaki@ias.tokushima-u.ac.jp

## Moraes's Garden

— (1) On the Forms of Diary and Essay —

Takayoshi Miyazaki, Masaya Satoh, Motohiro Sakai

Institute of Socio-Arts and Sciences, The University of Tokushima

1-1 Minami Josanjima-cho, Tokushima, 770-8502, Japan

E-mail: miyazaki@ias.tokushima-u.ac.jp

### Abstract

This paper is a part of Moraes's Studies launched in July 31, 2010. The members of Moraes's Studies, Takayoshi Miyazaki (English Literature), Masaya Satoh (Plant Physiology), Motohiro Sakai (Clinical Psychology), all at the Institute of Socio-Arts and Sciences, The University of Tokushima, are now continuing to try to analyze Moraes's works and to approach a new facet of Moraes's biographical aspects. Moraes was fascinated by the far-east Japan, and fell in love with Oyoné, who died soon after the marriage. After her death Moraes decided to live in Tokushima, which was Oyoné's hometown. He lived with Koharu, Oyoné's niece, for a while until she died from tuberculosis. His life until his death in Tokushima was a kind of hermit, disregard of his fame as Consul General and Navy high-rank Officer, and other financial merits entailed with them.

Moraes published *Tokushima no Bon-odori* in 1913 after Oyoné died. This work might be regarded as based on the forms of diary and essay, apparently as reports from Tokushima to Bento Carqueja, editor of Porto Commercial Newspaper in Portugal. He admired the form of diary and essay, especially Japanese type essay like those of Ki no Tsurayuki, Sei Shōnagon, Kamo no Chōmei and Yoshida Kenkō. With this in his mind, Moraes seems to express his inner world via this form of diary and essay. Though this work can be read as written documents of things and events in Tokushima in those days, which aspect is in itself very important and interesting, we should take notice that his innermost world is very meticulously veiled. This tentative paper intends to open a new perspective in a rather fixed image of Moraes and studies about him.

Key Words: Wenceslau de Moraes, Tokushima no Bon-odori, Forms of Diary and Essay, Moraes's Studies

## 1. はじめに

本研究は、徳島大学総合科学部学部長裁量経費・平成22年度総合科学部創生研究プロジェクトによる研究成果の一部である。研究プロジェクト名は「モラエスの庭—徳島の自然・人・心—」であり、研究参加者は、大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部の佐藤征弥（植物生理学）、境泉洋（臨床心理学）、宮崎隆義（英文学、代表者）の3人で、いずれも平成21年度から開設された徳島大学大学院総合科学教育部博士課程前期での共通科目「プロジェクト研究Ⅰ」の担当者である。

本研究論文の目的は、プロジェクトの遂行にあたりモラエスに関わる研究会を発足させた経緯や今後の展望を述べた後、例会として開いた研究会での成果をもとにして、モラエスの著作のひとつである『徳島の盆踊り』に関し論考の形でまとめたものである。

日本に魅せられ、市井の生活者として自分の目で見た日本の文化や歴史、風俗、習慣、生活などを、日本で知り合い関わった女性たちへの思いを繊細な感性で包み込みながら描いたこの作品について、彼が自宅の小さな庭に愛着しこだわっていたということに端を発して「庭」という概念と、彼が採った日記文学もしくは随筆文学という文学形式を念頭に置きながら『徳島の盆踊り』を読み解くことにより、モラエスの著作について新たな側面が見い出せていくものと思われる。

## 2. モラエス研究会 — 経緯と今後 —

プロジェクトが採択された後、代表者及び参加者は、今後共同で研究を進めると同時に、対象が徳島の文化的な遺産ともいえるモラエスであることを考えて、忘れられつつあるモラエスの啓蒙も兼ね「徳島大学総合科学部モラエス研究会」を立ち上げ、古くからあるモラエス会や徳島日本ポルトガル協会、その他地元にある関連団体との交流や連携を図ることを考えた。2010年7月31日（土）に、研究会発足の会を開いたが、そのことは地元の徳島新聞<sup>1</sup>でも大きく取り上げられた。

研究会の基本的な方針として、毎月1回程度を目標に読書会を開くこととした。取り掛かりとしては、

2010年3月に徳島県立文学書道館より「ことのは文庫」として再刊された、東京外国語大学岡村多希子名誉教授による翻訳であるモラエスの著作『モラエスの日本随想記 徳島の盆踊り』を参加者とともに読んで楽しみつつ、参加者から情報の提供を頂きながら同時にわれわれの研究の取り組みを披露する形ですすめていった。同時に、研究会のブログを作成し、それを徳島大学総合科学部のホームページにリンクした<sup>2</sup>。

2010年10月30日（土）の研究例会では、モラエス<sup>3</sup>の啓蒙と参加者の拡大を趣旨とし、公開読書会として、『徳島の盆踊り』の翻訳者でもある東京外国語大学名誉教授岡村多希子氏を招いて、講演を交えての読書会を実施した。

本研究プロジェクトは、平成21年度の大学院における「プロジェクト研究Ⅰ」を担当している3人の教員と大学院生の関心から生まれたものであるが、「プロジェクト研究Ⅰ」については、モラエスに関する調査も含めた研究成果としてまとめている<sup>4</sup>。その成果に鑑みて、平成22年度の「プロジェクト研究Ⅰ」においても、徳島の眉山や近隣の市街地を中心として、その歴史的な変遷や文化の諸相を、モラエスのことも視野に入れながら大学院生たちと調査しその一部を経過として平成22年度の報告書としてまとめている<sup>5</sup>。また、平成21年度の「プロジェクト研究Ⅰ」の受講者のひとりが立ち上げた「ふもと研究会」<sup>6</sup>は短信としてはほぼ毎月一度「ふもと通信」を発刊しているが、その「ふもと通信」にもモラエスのことやモラエス研究会のことが取り上げられており、また、代表者が研究会の様子や雑感を6回にわたって連載した<sup>7</sup>。

われわれが立ち上げたモラエス研究会は、徳島県立文学書道館や徳島県立図書館、徳島県立博物館、徳島

<sup>2</sup> <http://www.tokushima-u.ac.jp/ias/>

<sup>3</sup> モラエスのカタカナ表記については、岡村多希子氏の表記に従う。

<sup>4</sup> 「徳島の自然環境と歴史・文化 ～眉山山麓の寺社の興隆と衰勢、湧水について～」『平成21年度 プロジェクト研究報告書』（徳島大学大学院総合科学教育部、平成22年3月）、30-38。

<sup>5</sup> 「変わりゆく徳島の姿 — 眉山、新町橋、水路、狸信仰について —」『平成22年度 プロジェクト研究報告書』（徳島大学大学院総合科学教育部、平成23年3月）、1-10。

<sup>6</sup> <http://w3.ias.tokushima-u.ac.jp/sgp/pg51.html>

<sup>7</sup> 「わたしと麓（ふもと）」Vol.10以降。

<sup>1</sup> 2010年7月27日付11面、2010年8月1日付28面。

市立図書館等とも連絡を取り、モラエス関係の貴重な図書や資料について所蔵の情報を得ることができた。同時に、研究会例会の参加者を通して、徳島県立文学書道館の協力を得ることができ、そこに所蔵されているモラエスの貴重図書や資料を見るという資料見学会を2010年12月18日(土)に実施した。さらに、2011年2月の末には、研究プロジェクト参加者3人で神戸市並びに京都外国語大学で、モラエスに関連しての現地調査及びモラエス関連の資料や貴重図書の調査確認をすべく出張旅行を行った。3月にも読書会を開き、今後の活動予定についても協議したが、そこでは、できるだけ多くの学生に対し活動の紹介や参加の呼びかけを行なうこと、ロータリークラブなど他団体とも協力して研究会の活動を広げていくことなどが要望された。

徳島大学総合科学部学部長裁量経費・平成22年度総合科学部創生研究プロジェクトの申請計画においては、中期計画等を念頭に置き、地域科学の一側面として、徳島の歴史や文化の諸相を再発見すべく、グローバルな視野から徳島の自然・人・心を眺めることとし、モラエスにとって徳島が何であったかを、「庭」という文化表象をキーワードとして、その側面をそれぞれの専門分野から検討を加えてみることにした。だが、まだ基礎的な作業や資料の調査並びに確保が不十分であり、現状ではまだ継続中と考えられる。また、多方面、他分野との関わりも広く開拓してゆくことを目指しているが、この点では、モラエス会や徳島日本ポルトガル協会、さらにロータリークラブ<sup>8</sup>などとの連携並びに協力関係、また、県立文学書道館や県立図書館、県立博物館等との連携が得られている。モラエス研究会を立ち上げたことにより、研究会参加者より地元ならではの貴重な細かな情報を得ることができ、それをプロジェクト研究に役立てることができる状況が現在できつつある。

モラエスの研究、並びに研究会を立ち上げた目的には、地元の文化的な遺産としてのモラエスを、若い世代、特に学生たちに伝えたいということがあり、学生

の参加が得られているので、これをさらに広げてゆきたいと考えている。

徳島の文化的な遺産ともいえるモラエスについての研究を、地元の研究教育機関、特に総合科学、地域科学を探究する総合科学部、総合科学教育部で行うことを始めたという点で、これまでのプロジェクトの進捗状況は、やっと研究の基盤ができつつあることを考えれば、まだ低いと見なさざるを得ない。今後さらに時間をかけ地道な努力を重ねなければ、本プロジェクト参加者の考える研究の成果は十分に期待されないが、その過程で、徳島大学の学生や地域の市民、さらには神戸の市民に対してもモラエスに対する啓蒙が行えると考えられる。また、モラエスを通して、異文化との関わりとして、現代に即した、また徳島や徳島大学もしくは徳島大学総合科学部での教育研究の状況に照らし合わせて、様々な側面を新たに見出すことが出来るであろうし、さらに、ポルトガルとの関連で、国際的な交流、学術交流も可能になると思われる<sup>9</sup>。

### 3. 『徳島の盆踊り』<sup>10</sup> — 「庭」としての徳島 —

ヴェンセスラウ・ジョゼ・デ・ソーサ・モラエス(Wenceslau José de Sousa Moraes, 1854-1929)<sup>11</sup>の生涯の詳細については、岡村多希子氏の『モラエスの旅ポルトガル文人外交官』(彩流社, 2000年)に委ねるが、彼が徳島に移り住んだのは大正2年(1913)7月のことである。神戸ポルトガル領事の辞任さらに海軍軍籍離脱を願い出て、愛していたおヨネの墓のある徳島にや

<sup>9</sup> 研究会のブログがきっかけとなり、モラエスの遠縁の子孫であるベルギーのブリュッセル自由大学ジョゼ・モライス(José Morais)名誉教授との共同研究が今後見込めるようになっていく。

<sup>10</sup> 『モラエスの日本随想記 徳島の盆踊り』(こののは文庫, 徳島: 徳島県立文学書道館, 2010年3月)。以下、『徳島の盆踊り』とし、引用はすべてこの版に依るものとし、引用の後に括弧書きで示す。

<sup>11</sup> Moraesの綴りに関して、花野富蔵『日本人モラエス』(東京: 大空社, 1995年, pp.12-15)によれば、1911年以降ポルトガル政府はMoraesをMoraisと改めさせたことあり、モラエス自身、両方を混用している。眉山山頂のモラエス館に展示されている海軍時代の論文と『日本におけるメンデス・ピント』では、Moraisとなっている。ちなみに、彼の死後出版された『モラエスの恋』は*Os Amores de Wenceslau de Morais* (Editorial Labor, 1937)となっている。

<sup>8</sup> 国際ロータリー第2670地区ガバナー月信 'Governor's Monthly Letter'に、表紙特集としてモラエスが扱われ、宮崎(2011年8月号「モラエスの残したモノ — その作品群についての紹介 —」)、佐藤(2011年12月号「海軍軍人から外交官への転進」予定)、境(2012年2月号「徳島への移住…トクシマニ ヤイテクダサレ…」予定)がそれぞれ寄稿。

ってきた理由については、様々な憶測を働かせることしかできないが、おヨネの追慕に暮らしながら、彼の繊細な感性は徳島の地でいっそう研ぎすまされたといっただけでよからう。「零の免状、学位」は、『徳島の盆踊り』に出てくる言葉だが(188)、神戸領事や海軍軍人といったいわゆる俗世での華々しい地位や名誉、さらには安定し保証された生活を捨て去って、おヨネのふるさと徳島で、亡きおヨネへの追慕に生きたその生き様には、彼が傾倒した鴨長明や吉田兼好などの日記文学や随筆文学に鑑みれば、日本人の感性に一脈通じるものがある。

徳島ではおヨネの姪、斎藤小春、コハルと生活をともにするが、そのコハルも大正5年(1916)8月に結核で古川病院に入院、10月に23歳の若さで亡くなる。

『徳島の盆踊り』は、モラエスが、1913年7月に徳島に隠棲しコハルと暮らし始めて、その年の12月には執筆に取りかかった作品である。ポルトガルの新聞『ポルト商報』の編者ベント・カルケジャ(Bento Carqueja)の要請によりほぼ1年かけて執筆されたが、執筆の前に、題名や全体の構成は十分に考えていたようである。岡村多希子氏によれば、遅くとも1913年12月には執筆にかかり、翌1914年9月に書き終えており、新聞には、1914年3月5日から1915年10月3日にかけて68回に分けて掲載されている。

カルケジャの要請に応じて、「日本の、主として本州の他の地方都市と異なるような顕著な特徴をもたない地方都市」(59)である徳島に住み着き、そこに暮らす人々を歴史や地理、風俗、習慣の面から眺め、その暮らしぶりを詳細に描くことで、「日本のこの地は、真の日本の国の姿を見せてくれる」(71)と書いているように、この徳島を、ここに暮らす人々を描きながら広く普遍的な日本人の心性を描き出していると見なすことが出来る。特に、顕著なトーンとして流れている「死」について、日本人の死生観を探ることは、逆に考えれば、「死」を間近に控えた西洋人としてのモラエスが、自分の「死」とどう向き合うかが探られているといっただけでよからう。

モラエスにとって「徳島は、何よりもまず、神々の町、仏たちの町、死者の町である」(66)と目に映っている。確かに、モラエスが住んだ伊賀町の長屋あたりから、モラエスが日々散歩したあたり、眉山周辺は徳島でも寺社が密集しているところである。西洋人であるモラエスばかりでなく、この地を訪れた者は、現在

でも、眉山山麓に蟻集するように集まっている様々な宗派の寺社や墓地の広がりには驚かされるであろう。また、住宅地や田畑の中に墓地が点在している徳島の風景は、モラエスの目に映った「死者の町」そのままのイメージと言ってよいかもかもしれない。その「死者の町」は、「盆踊り」の時期に死者の霊が帰ってくるということに対するモラエスの驚きとともに、生者と死者とがともに暮らしている町なのである。

したがって、正しくは、死すなわち家族成員の絶対的排除は起こらないのである。生者と死者とのあいだには、現にそこにいる成員とそこを留守にしている成員とがいるにすぎない。(235)

西洋人、「血管の中にアリアンの血をもって」(318)いるモラエスの発見と驚きを、単純に、西洋普遍の、あるいは典型のものと見なすのは早計だが、彼の感性を通しての驚きによって、むしろわれわれ日本人が「死」というものを意識的であれ無意識的であれどう捉えているのかが理解される。家の中に必ずあるといっただけでよい仏壇や神棚は、モラエスにとっては、家そのものが「寺院」(72)となり得ているのであり、家に通ずる門や庭は、寺社の境内と同じ意味を持つものであろう。

目に入るすべてのうちでいちばん興味深いのは入口である。差掛けつきの入口は、木製の格子の引き戸によって閉されているので、苔で青々とした中庭に好奇の目差しを投げかけることができる。中庭の地面には敷石が並べられ、内玄関までその上を踏んでゆく。一寺院の入口のようだ。そして、家は寺院なのだ。単なる家庭の義務に献身し、家長を敬いながら厳かな平和のうちにそこに暮らしているものと想像される家族の寺院なのだ。(72)

岡村多希子氏が翻訳の原本としたポルトガル語版の‘O “Bon-odori” em Tokushima (Caderno de impressões íntimas), Porto, Companhia Portuguesa Editora (2 a, edição), 1929’では、日記体としての年月日を擬して、『ポルト商報』に掲載された日付、もしくは執筆の日付としてモラエスの随想が綴られてゆくが、岡村多希子氏の翻訳『徳島の盆踊り』では、便宜



上読者にわかりやすいようにと、岡村多希子氏の判断により章分けがされ、各章の内容を要約した簡単なタイトル、さらに、目次においても章をいくつかのグループに分けてそれらにタイトルが付けられている。その翻訳上の便宜に従えば、モラエスは、「徳島考」において、「徳島の印象」「徳島の概観」「徳島城趾の風景」「伝統的な町のたたずまい」「住宅 庭園」「石」「長屋の庭」と、おおまかに徳島の土地の紹介とその概略、そして自分が住む伊賀町の長屋にしつらえた小さな庭へと視点を移していると考えることができる。

日本を楽園と見なしたピエール・ロチ(Pierre Loti, 1850-1923)に倣ってか<sup>12</sup>、モラエスの目にとっても日本は楽園に映っている。ピエール・ロチが次第に日本に対して興ざめし、幻滅と軽蔑に傾いていったのとは異なり、モラエスは、まさに「零の免状、学位」を得るべく市井に入り込むことにより、日本人の心性を自分の感性の中に取り込もうとしたといえるだろう。その努力がモラエスのまなざしに表れているといつてよく、そのまなざしの向こうに「庭」があると考えてよい。『おヨネとコハル』の中に「私の追慕の園で」という章があるが<sup>13</sup>、伊賀町の長屋、モラエスの隠棲の家にあったという小さな「庭」は、仏壇を置いた彼の家の中に通じてゆく、いわば「一寺院の入口」なのである<sup>14</sup>。『徳島の盆踊り』原本には、モラエス自身による挿絵が随所に見られるが、冠木門らしき門の挿絵が2種類ある<sup>15</sup>。門は境界であり、その境界を越えると庭の広がりへと入ってゆくことになる。その庭にある石灯笼<sup>16</sup>は寺社の空間を換喩的に表していると考えてよいが、さらに屋敷の中、家の中に<sup>17</sup>入ってゆくとそこには仏壇<sup>18</sup>が安置されている。仏壇のある間には、火鉢<sup>19</sup>が備えられていて、その火鉢に人が集まることと

なる。「アリアンの血」を持ちキリスト教の文化に育った19世紀の西洋人モラエスが、当時のヨーロッパ文化に包まれていたことは当然のことであろうし、日本文化の事物に対してある程度ヨーロッパ文化を重ね合わせて眺めていたであろうことは予想できるが、その観点で彼の描いた挿絵を考えてみれば、火鉢は、ヨーロッパの家庭における暖炉に喩えることができるかもしれない。暖炉は家庭の象徴であり、暖炉の前には家族が集まり、そこには家庭の天使ともいえる妻の存在がある<sup>20</sup>。だが、その妻の存在ともいってよいおヨネは既に亡き人であって、彼女は仏壇の中に居るのである。こうして考えてみると、おヨネの位牌が置かれた仏壇を中心として、庭を含めた「寺院」の空間、「家」の空間が作られていることがうかがえる。そして、モラエスの住む長屋を含む伊賀町は、さらに徳島の町に包含され、徳島の町そのものが彼にとって「寺院」、寺社の世界であり、楽園の世界となってゆくといつてよい。「死者の町」と形容された徳島は、ピエール・ロチが東洋の日本をこの世の楽園と見なしたように、モラエスにとっても楽園でありながら、その楽園は、生者が棲息しながらも不在者である死者とともに共生している世界であり、死者の霊が盆に帰ってきて盆踊りの時期にひと時を過ごすことのできる世界なのである。その意味では、おヨネの追慕に生きるためには、モラエスはおヨネの霊が帰ってくる徳島に住むよりほかなかったのかもしれない。仏教でいうところの輪廻の考えに感銘し、飛び交う螢に「おヨネだろうか、コハルだろうか」と一瞬幻想に捕らわれた名品などは<sup>21</sup>、モラエスの日本人の死生観に対する彼の感得を示しているものとみなしてよかろう。同時に、老年に至って死を意識し、その死と向き合おうとしたモラエスの心理をもうかがうことができる。楽園の概念は、庭園、庭の概念と通ずるものであり、死の世界とのつながりを持った世界でもある<sup>22</sup>。伊賀町の長屋に終の住処として居を構えたモラエスは、「死者の町」徳島をあの世界に通ずる世界と見なし、さらにおヨネの位牌を置いた仏壇を中心として、幻想としての「家」、家庭を夢想しつつ、自分に迫りつつある死を見据えていたともいえる

<sup>12</sup> 本名は Louis Marie-Julien Viaud。モラエスはロチを敬愛し『おヨネとコハル』では、*Les derniers jours de Pékin* の一節をエピグラフとして掲げている。

<sup>13</sup> 岡村多希子訳『おヨネとコハル』(東京：彩流社、1989年)、177-183。

<sup>14</sup> ここにあった石の灯笼は、現在、潮音寺の墓所のそばに移されているが、灯笼は寺社の換喩に通ずるものといえる。

<sup>15</sup> 挿絵1, 2。

<sup>16</sup> 挿絵4。

<sup>17</sup> 挿絵3。

<sup>18</sup> 挿絵5。

<sup>19</sup> 挿絵6。

<sup>20</sup> 例えば久守他編著『英米文学にみる家族像』(東京：ミネルヴァ書房、1997年)参照。

<sup>21</sup> 『おヨネとコハル』所収。

<sup>22</sup> 川崎寿彦『楽園と庭』(中公文庫723、東京：中央公論社、昭和59年)参照。

だろう。しかしその死は、おヨネやコハルのいる世界、あるいはまた遠く若い日に愛したマリア・イザベルのいる世界なのであり、彼の遺言に示された埋葬法の希望が<sup>23</sup>、彼の永遠の死の世界への希求を示していると考えてよからう。

モラエスは、『徳島の盆踊り』の構成を十分に考えて執筆をしているといわれるが、その構想の中に含まれたモラエス自身が描いた挿絵は、彼の書いた文章とともに彼の内面の表象であって、その挿絵を分析することにも大きな意味があると考えられる。これまでに触れた挿絵の他に、檻に入ったオランウータンとおぼしきもの（挿絵8）、石柱の上に載せられた盆栽のようなもの（挿絵7）、猫が戯れるもの（挿絵10）、千代女の歌を書いた立て札（挿絵9）などがあるが、そうしたものは、モラエスの内面を表しているともてよい。盆栽は小さな庭の空間ともてよい。オランウータンらしきものについては、日本語がほとんど使えなかったモラエスが、土地の人々と言葉の上で通じ合えぬことの寂しさを表しているよう。猫についても、言葉を持たぬ動物に自分を重ねている様子がかがえる。千代女の立て札は、自分とおヨネやコハル、その他の人々との関わりと同時に日本人としての遠慮の感性を示していると考えてよいかもしれない。こうしたモラエスの手による挿絵については、また稿を改めて分析を行うつもりである。

#### 4. 日記文学もしくは随筆文学ということ

##### — 虚と実の間 —

モラエスは、『徳島の盆踊り』の中で、日記と随筆について次のように触れている。

ところで、私は数年前に『ポルト商報』のある欄で、今言っている文学ジャンルを軽くたたえたことがある。それをくり返す必要はあるまい。

日記と随筆は二重の意味ですすめられると言うだけでここでは充分であろう。書き手にとっては、印象を書きとめる、心に浮かび、たちまち消えて

しまう束の間のおもいを引きとめるということとはたいへんに楽しいことである。このような文章を、発表の意図をもたずに、単なる精神修養として書くように青年たちにすすめたら、きっと立派な教育法、誠実さと善行を实践させるための強力な習慣の矯正法となるであろう。そして、読書の娯楽を執筆の娯楽ととり替えることによって、人は読んだことを感じるというよりも、感じたことを書くというすばらしい特権をもつことになる。読み手にとっては、この文学ジャンルは、人間の魂の研究の魅力を他のジャンルよりもはるかにゆたかに与えてくれる。というのも、著者が、たいていは自分自身について、目に入ることについて、耳に入ることについて、考えていることについて、していることについて、形式や文体のことなど何も考えることなくおしゃべりをするように、打ち明けばなしをするように語り、ひとりごとを言うからである。それに較べると、暇人が手にするのが流行になっている、例えば小説は、フィクションのもつあらゆる欠点を寄せ集め、想像上の人物に生命を与え、効果を狙い情緒的特徴を強調して、真実をゆがめ、私たちの天賦の感性を損なう。

このように私は青年たち — 少年や少女 — に内的日記や随想記を書くようすすめるものである。しかし同時に、自分のおもいを、魂の状態を日々記録し、書いたものを気ばらしにひもとく時にいつでも過去を再び生きることができるといことは、老人にとっても何と楽しい習慣であろう！ ……私はスイスの詩人、モラリストのアミエルの感動的な考え方を思い起こす。彼は長年にわたって死の前日まで日記を綴っていたが、どこかでこう言っている。

「君の思索と君の遺書を作りたまえ。君がなすことができ、いちばんためになるのは、それなのだ。」(28-30)

徳島から本国ポルトガルの『ポルト商報』に書き送った『徳島の盆踊り』(1916)、その頃から4年近くをかけて書かれた『おヨネとコハル』(1923)は、日記文学や随筆文学に傾倒していたモラエスが、そうした文学形式を模して自分の人間性と感性を豊かに繊細に吐露することに成功した作品であって、さらに彼の生活の事実とそれを体現とした彼の境地を知るにふさわし

<sup>23</sup> モラエスはその遺言において、火葬と仏教による埋葬を望み、さらにコハルの灰と一緒にしてもらうことを望んでいる。詳しくは秦敬一「モラエス考 — 「遺言状」をめぐる —」『語文と教育』第3号（鳴門教育大学国語教育学会、平成元年）。

い優れたものであろう。文学という言語芸術が、人間の内面にある果てしなくも複雑な深淵の一断面を描き出すひとつの機能であり手段であるとするならば、モラエスのそのふたつの作品は、その方法と結実において見事に調和していると見なすことができる。

東洋への関心が一層高まった19世紀というエキゾチズムの時代、海軍軍人としてマカオを経由し日本にやってきたモラエスは、日本の魅力にすぐに取り憑かれる。それまでの先人たちの例に倣って、極東の日本を紹介すべく精力的に書かれた、『極東遊記』(1895)、『大日本』(1897)、『日本通信Ⅰ』(1904)、神戸で自費出版した『茶の湯』(1905)、『日本通信Ⅱ』(1905)、『中国・日本風物誌』(1906)、『日本通信Ⅲ』(1907)、『日本におけるメンデス・ピント』(1920)、『日本史瞥見』(1924)、『日本夜話』(1926)、『日本精神』(1926)、『日本通信Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ』(1928)などは、産業革命以来急速な発展を遂げながらも、文明に対して信頼を失い始め、美と精神の価値を遙か遠い東洋に求めようとしたヨーロッパの人々の精神的渇きを癒し、さらにその精神の方向性を示そうとする、まさに水先案内のような役目を持ったものであったといえるかもしれない。と同時に、詩人のように繊細で感性豊かなモラエスが自分の内面を吐露する文学形式を模索してゆく上で、それぞれの作品は、ある意味で、彼にとってはよき習作的なもしくは補完的な側面を持っていたと見なしてよからう。

ヨーロッパから遠く離れた極東の日本、その四国の徳島に辿り着いて、狂おしいまでの孤愁(サウダーデ)に生を終えたひとりのポルトガル人モラエスが見つめた日本は、彼の著作、言語作品を通し、その言語空間の中で純化永遠化されているといってもよい。言葉に記すことは、ある意味で、忘れられ失われてゆくものを永遠化するすべでもある。彼が究極に求めたのは、現世の肉体を離脱した死者の世界、おヨネとコハルの住む、あるいは遠く若き日に愛したマリア・イザベルが住む純粋な永遠の世界であろうが、エキゾチズムという言葉が、皮肉にも、充たされない精神の不安を表す時代に生きたモラエスが書き残したものは、科学技術と経済原理とが支配しているかに思われる現代においても、我々が抱える精神の渇きにひと筋の光を投げかけてくれるものかもしれない<sup>24</sup>。

おヨネのふるさとであった徳島に移り住むことを決意し、おヨネの姪に当たるコハルとも一緒に暮らし、事実上の結婚生活を送ることとなったが、おヨネの死後書かれた『徳島の盆踊り』は、徳島に移り住んだ後、追慕の情に浸りながら、亡きおヨネへの思いを極力抑えつつも、当時の徳島の様子を細かく描き出している。

先の引用において、モラエスは、追慕の情を表すには、小説よりも日記、随筆が適しているとし、「小説は、フィクションのもつあらゆる欠点を寄せ集め、想像上の人物に生命を与え、効果を狙い情緒的特徴を強調して、真実をゆがめ、私たちの天賦の感性を損なう」としている。モラエスが、小説とフィクションをどのように区別しているのかが少し曖昧であるが、彼の著述の経歴を考えてみれば、海軍軍人としていわば旅行者であった彼が、フィクションよりも日記や随筆の形式に向かっていったのは、当然の成り行きだったといってもよからう。

『徳島の盆踊り』を、フィクションと対極するノン・フィクションとして読むということは、モラエスが述べているように捉えれば、彼の内面、彼の魂の言葉を知ることになり、読む側にある我々読者は彼の「魂の研究の魅力」をゆたかに味わうことができるということになる。だがノン・フィクションというものは、単純に、外的なデータの客観的で忠実な記録ではない。記録の態を示していながらも、そこには必然的に書く者による意図的なあるいは無意識的な取捨選択が行われている。モラエスの考え方に従えば、ノン・フィクションに付随するそうした意図的あるいは無意識的な取捨選択に、書く者の感情や考え、魂の表出がなされるということになるだろう。

19世紀後半に大きなうねりとなり始めたいわゆる文学におけるリアリズムに呼応して、その頃の小説もいかに本当らしさを備えるかが重要視されてくる。例えば、19世紀イギリスの女流作家ジョージ・エリオット(George Eliot, 1819-1880)は、その『アダム・ビード』(Adam Bede, 1859)において自分の文学論を展開し、鏡のイメージを用いて「一滴のインクを鏡として過去の姿をありのままに映し出す」ことをしたいと述べている<sup>25</sup>。小説、すなわちフィクションと、ノン・

ナ一月信 'Governor's Monthly Letter' に掲載した拙文 (2011年8月号「モラエスの残したもの — その作品群についての紹介 —」) と重複する。

<sup>25</sup> 'With a single drop of ink for a mirror, the Egyptian sorcerer

<sup>24</sup> このあたりについては、国際ロータリー第2670地区ガバ



フィクションとの違いは、簡単に言えば、実生活の事実が基になっているかどうかの違いであるが、たとえ作り物の世界であろうとも、そこには、書く者の内面、魂が反映される。

『徳島の盆踊り』をどういう性格の作品と捉えるか、つまりノン・フィクションと捉えるかあるいはフィクションと捉えるかが、非常に微妙になってくるが、モラエスの実生活が基になっているとして、彼の主張するようにノン・フィクションとしての日記もしくは随想として読むとして、そこに存在している「物語る」行為については注意を払っておくべきであろう。例えば、ジョナサン・カラー(Jonathan Culler)も述べていることだが、われわれは「物語る」ことによって現実の認識と把握を行う<sup>26</sup>。「物語る」ということは、われわれを取り巻く現実をどう捉えるかということである。同じような趣旨を、作家の小川洋子氏も次のように述べている。

たとえば、非常に受け入れがたい困難な現実にあふつかったとき、人間はほとんど無意識のうちに自分の心の形に合うようにその現実をいろいろ変形させ、どうにかしてその現実を受け入れようとする。もうそこで一つの物語を作っているわけだ<sup>27</sup>。

日本において特徴的なものとなった小説の形式に私小説があるが、私小説の系譜の一端には、日記文学、随筆文学があるといってもよからう<sup>28</sup>。ヨーロッパの文学において、一人称小説がその人物の心理を描き出すことに向かったとしても、その根源では、18世紀の近代小説黎明期に生まれた、日記や随想、あるいは書簡という形式によって心理を描き出す伝統に通じている。日本の私小説と、ヨーロッパの一人称小説には、大まかにいえば、主人公の実生活に基づくか虚構であるかというところに違いがあろうが、実生活に基づい

ているとされる私小説にも虚構の部分が常に存在している。

モラエスが小説よりも日記や随想記に傾倒しつつも、彼が時間をかけた構想を経て書き残したものは、その日記として随想として「物語る」行為によって生まれた「物語」に他あるまい。彼にとっての現在の徳島の姿を眺めながら、彼は「物語る」ことによって、エリオットのように、彼の「過去の姿」、おヨネに対する追慕を根底に置いた「過去の姿」を描き出そうとしていると考えてよいだろう。日記や随想を読み返すことによって「過去を再び生きることができる」(30)と述べたモラエスにとって、追慕の形を取りながら、それは愛する者の死という現実をどう捉えるか、さらには自分に迫りつつある死を現実としてどう受け入れるかについて、彼の心の形に合うように変形させ受け入れようとして出来上がった「物語」といえるかもしれない。

モラエスは、前掲の引用でもわかるように、小説よりも日記や随想記に重きを置いているが、海軍軍人で海洋の旅人でもあった異邦人モラエスが、東洋の日本に魅せられ、それを本国ポルトガルに伝えるという形で始めた彼の執筆活動が、日記文学や随想記と同様の見聞録となったのはごく自然なことであるといつてもよからう。日本で見たもの聞いたこと、感じたこと考えたことを文章として綴り、報告の形でなされたものが、先にも列挙した『極東遊記』(1895)、『大日本』(1897)、『日本通信 I』(1904)、『茶の湯』(1905)、『日本通信 II』(1905)、『中国・日本風物誌』(1906)、『日本通信 III』(1907)、『日本におけるメンデス・ピント』(1920)、『日本史瞥見』(1924)、『日本夜話』(1926)、『日本精神』(1926)、『日本通信IV, V, VI』(1928)なのである。彼とほぼ同時期のラフカディオ・ハーン(Patrick Lafcadio Hearn, 1850-1904)やそれ以前に日本にやってきた異邦人たちも、日本の風物に触れ、随想を交えてヨーロッパの世界に対して報告をおこなっているのである。こうした随想を交えた報告を経験したモラエスは、日記や随想記に重きを置き、その延長上に見出した日本の紀貫之、清少納言、鴨長明や吉田兼好などの日記文学や随筆文学に強く傾倒し、それを模して『徳島の盆踊り』並びに『おヨネとコハル』を頂点とする日記体の作品、随想の作品を書くに至ったと考えてよからう。またモラエス自身、明確に『徳島の盆踊り』を日本のそうした古典に倣って書いたと記している(25)。

undertakes to reveal to any chance comer far-reaching visions of the past. This is what I undertake to do for you, reader.', Chap.1.

<sup>26</sup> 'We make sense of events through possible stories', *Literary Theory: A Very Short Introduction* (Oxford: Oxford University Press, 2000).

<sup>27</sup> 『物語の役割』ちくまプリマー新書053, 東京: 筑摩書房, 2007年。

<sup>28</sup> 鈴木登美『語られた自己—日本近代の私小説言説』(東京: 岩波書店, 2000年) 参照。



しかしながら、前述したように、『徳島の盆踊り』が、当時の徳島の様子を詳述した記録文学としての価値を持ちつつも、虚構の側面を持っていることを忘れてはならない。おヨネへの思いが初めて明らかにされていながらも、その表出は極めて控えめであり、コハルについての記述もあるいは自分の子供についてと思われる記述も極力感情を抑えたものなのである。その意味では、先に引用した、彼がこの文学ジャンルについて述べたことと矛盾しているともいえる。『徳島の盆踊り』、さらには『おヨネとコハル』は、実生活の実体験に基づいたものでありながらも、虚構としての日記文学、もしくは随想文学なのであり、モラエスの内的世界の仮構と考えるとよかろう。それは、モラエスが「物語る」ことによって作り上げて示した現実の「過去の姿」であり、また、これから迎えようとする避け難い「現実」の彼なりの捉え方であったとってよいかもしれない。

日記文学、随筆文学としての『徳島の盆踊り』は、モラエスの実生活に基づいたものであり、当時の記録として読むことは一面では可能である。だが、モラエスは、事物以外の出来事について、意図的かあるいは思い違いかによって当時の記録とは異なる記述をいくつか行っている。海軍軍人であり、神戸総領事であった彼が、生来とともに職業柄、非常にこまめにまた正確に日記もしくは記録を残していたということ、またきめ細やかに絵はがきや手紙を妹や知人たちに書き送っていたことが知られているが、彼の内面の表出がそうした書き物に率直になされていたとみなすことには疑問がある。一般的に考えても、受け取る相手に、さらには不特定多数の人間に読まれる可能性を想定すれば、おのずと真意というものは何らかの形で抑制されるものであるが、おヨネとの実質上の結婚のこと、コハルとの実質上の結婚と出産のことなど、当事者や関係者を慮っていることもうかがわれ、正確な事実やモラエスの真意はある程度ベールに包まれているといってもよい。

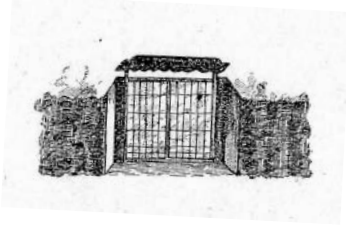
モラエスの日記文学、随筆文学の頂点としての『徳島の盆踊り』並びに『おヨネとコハル』については、その実と虚の間をさらに今後詳細に調査し検証してゆく必要がある。そうした作業を通して、今後あらたなモラエス像が生まれてくる可能性がある。

## 参考文献

- ヴェンセスラウ・デ・モラエス. 岡村多希子訳. 『徳島の盆踊り』ことのは文庫, 徳島: 徳島県立文学書道館, 2010年.
- . 『おヨネとコハル』東京: 彩流社, 1989年.
- 岡村多希子. 『モラエスの旅—ポルトガル文人外交官』東京: 彩流社, 2000年.
- 小川洋子. 『物語の役割』ちくまプリマー新書 053, 東京: 筑摩書房, 2007年.
- 川崎寿彦. 『楽園と庭 — イギリス市民社会の成立』中公新書 723, 東京: 中央公論社, 昭和59年.
- 鈴木登美. 『語られた自己 — 日本近代の私小説言説』東京: 岩波書店, 2000年.
- 徳島県立図書館. 『モラエス案内 (増補再販)』徳島: 徳島県立図書館, 平成7年.
- 秦敬一. 「モラエス考 — 「遺言状」をめぐって —」『語文と教育』第3号, 鳴門: 鳴門教育大学国語教育学会, 平成元年.
- 花野富蔵. 『日本人モラエス』東京: 大空社, 1995年.
- 久守和子, 高田賢一, 中村邦生編著. 『英米文学にみる家族像 — 関係の幻想』東京: ミネルヴァ書房, 1997年.
- Culler, Jonathan. *Literary Theory: A Very Short Introduction*. Oxford: Oxford University Press, 2000.

『徳島の盆踊り』原本の挿絵<sup>29</sup>

挿絵1



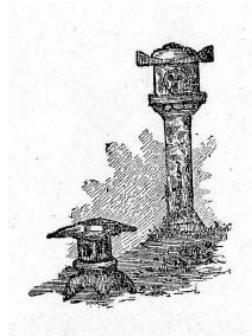
挿絵2



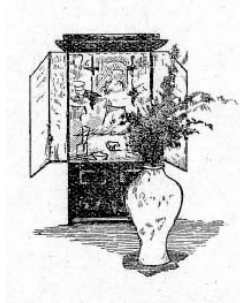
挿絵3



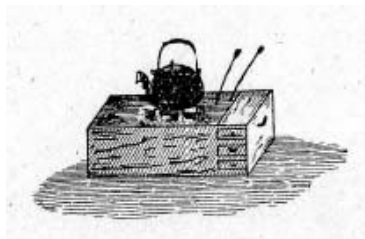
挿絵4



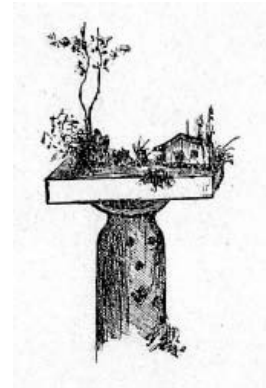
挿絵5



挿絵6



挿絵7



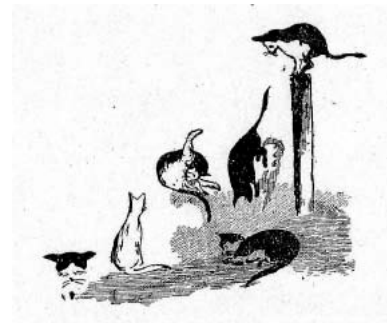
挿絵8



挿絵9



挿絵10



<sup>29</sup> この挿絵は駒沢大学図書館所蔵の1916年版による。